

# 松家工房さんへ

ありがとう  
ございました



## 松家工房と出会うまで

結婚してすぐにマイホームについて関心を抱いていた。初めて家を見に行っただのは、大手メーカーのSハウスだった。妻と共に見に行っただが、そこは見事な分譲地で「うわ～すごいな！」と感じて心が動いたことを今でも覚えている。営業の方に案内され、いざ建物の中へ。その時「なんだ、この狭さは？」とか、「何このデザイン？」といった感じで、かなり拍子抜けしてしまった。よくよく考えてみれば、「その人がどんな家に住みたいか聞く前から勝手に家を建ててるのは変じゃない？」と思うようになった。それに、その家を買うとなると、月々の支払いが12万円、そしてボーナス払いが22万円も必要であった。それを営業の方は「皆さん大体こんな感じですよ」と言っていたが、こちらとすれば「魅力を感じなかったものにそこまでのお金は支払いたくない」と感じた。そもそも私は嘘つきの営業は嫌いなので、Sハウスの家はやめておくことにした。

子どもが生まれ、高石市に引越しした際、ある工務店のチラシが入っていた。そのチラシには、その工務店が建てた家がいくつか載っており、なかなかおしゃれだなと感じた。妻に見せてみると、「こういう感じの家かわいいね」と、好印象だったため、その工務店の内覧会に行くことにした。実際に建てた家に行くと、たくさんの人達が足を運んでおり、期待感もかなり高まった。いざ中に入ってみると、玄関の床材の肌触りがかなり悪かった。さらに、リビングがかなり狭い。キッチンも狭い。Sハウスよりも拍子抜けした。それでも、他のお客さんは興味津々で、「いいねえ」と言いながら家を見ていた。あの光景は何だか異様だった。あまりに魅力を感じなかったため、がっかりして家に帰った。とはいえ、それから何度かその工務店のホームページは見ていた。

いつものようにそのホームページを見ていた時、「私達の工務店は、大阪の注文住宅という本に載っています。」という文があった。大阪の注文住宅という本の存在すら知らなかった私は、「何だそれ？一回買ってみようかな」と思い、書店でその本を購入した。

## 松家工房との出会い

大阪の注文住宅という本を読んでいた時、たくさんの施工業者が載っていて、どれがどれか全く分からなかった。ぺらぺらとページをめくっていたところ、私の目を引いた文字があった。「年間5棟」という文字だった。ここなら「1件、1件丁寧に建ててくれるのでは？」と思い、よく読ん

で見ると、坪単価を書くところに「一概に言えない」とも書いていた。なんと正直な！そして、木のぬくもりを感じる家の写真。そのページに載っていたのは「松家工房」という名前だった。その時から、「ここや！」と感じていた。私は何かと縁を感じる方で、記事の内容と松村さんの写真を見た時、「松家工房と縁がある」と感じた。だからこそ、絶対に事務所は高石のそばにあると確信し、実際に確認してみると堺市と書いていた。「よっしゃ！ここや！」と感じたことを今でもよく覚えている。そして、ホームページを確認したところ、素晴らしい家がたくさん載っていた。さらに、『お客様の声』というところを読んで驚いた。全ての人が感謝という気持ちを超えているような手紙を送っていた。真心を込めてお仕事されていることがよく分かった。

次の日いてもたってもいられず、松家工房に電話した。電話に出られたのは江熊さんだった。とても言葉遣いが丁寧で、好印象だった。さらに江熊さんは、「私達に家づくりについてお話させていただくチャンスをいただけるのであれば」とも語られた。この謙虚な言葉が胸に刺さった。

それからは事務所に伺う日が待ち遠しくて仕方なかった。その日のために、何度もホームページを熟読した。

## 初対面

事務所に初めて行った時、あまりにうれしくて事務所のドアをノックもせずにかけてしまった。妻に「ノック！」と言われ、「あ！」と思った時、笑顔の松村さんと江熊さんが温かく迎えてくださった。それから、事務所の椅子に座り、家について様々なことを教えていただいた。(余談になるが、松村さんが私達夫婦と長時間お話しされたのはこの時が最後かもしれない。それ以降は息子が松村さんを独占している気がする。)

お二人とも、話が止まらなかった。よくよく考えれば初対面。それでも、家のこととなるとお二人ともすごい。本当に家づくりが好きなんだなと感じた。そんな折、松村さんが「江熊、私達ばかりしゃべってどないするん？、お客様のご要望を聞かないと」とおっしゃられた。そして、妻が「地震に強い家」と言った途端、松村さんの目の色が変わった。さっきまで「ご要望を聞かないと」と発言された松村さんが、スーパーストロング工法と松家工房の基礎の違いについて熱く語り始めた。江熊さんもさすがに松村さんにツッコミを入れるのかと思いきや、松家工房の基礎の写真を出されて、松村さんが話されているのかぶせてさらに基礎について語られていた。私は必死に笑いをこらえていた。このシーンは今でも忘れられない。それと同時に、本当にお二人とも熱いなと感じ

た。基礎の話が終わりかけのころに松村さんが「見えないところほどきっちりしておかないと、後で大きなしっぺ返しがかかるんです。」とおっしゃられた。初対面の私達にも真剣に話をしてくださるその姿勢に感動し、松家工房さんで家を建ててほしいという思いがどんどん膨らんでいった。

時間もいいころだったので、「私にとってどこで建ててもらうかの決め手は、誠意です。その誠意が今日すごく伝わりました。松家工房さんに私達の家を建ててほしいと思います。」と伝えて帰ろうと思った。そして、私が「どこで建ててもらうかの決め手は誠意です。」と言った途端、松村さんに「そんな中途半端なことではいけません！」と言われた。私は「え〜〜〜！！！！今からよろしくお願ひしますって言おうとしたのに」と思い、かなり驚いた。しかし、その後の松村さんの言葉が素晴らしかった。「笑顔です。その家に住んでいる方々の笑顔を見てください。」と。体に電気がはしるような思いがし、松家工房は本物だなと感じた。その後、松村さんに「どうしますか？もうちょっと他の業者も見られますか？」と聞かれたが、私は「もう他を見る気はありません。」と答えた。

## 土地探し

ここからが本当に大変だった。何ともポンスケだった私は、土地なんてどれも同じ、どの土地に建ててもさほど変わらないと本気で思っていた。しかし、現実には違った……。土地探しについての物語は、裕住宅のホームページに載っているので大半のことは割愛させていただきたい。

江熊さんと松村さんにお会いできることもなく、ただ土地を探し続けていた毎日。来る日も来る日も土地に関する情報を仕入れていたが、いい土地が見つからない現実に、正直気持ちは疲れ果てていた。そんな時、ふと妻の実家の近くで中古物件が見つかった。価格もお手頃。何より妻の実家に近いことも魅力だった。「もういいや、松家さんには悪いけど、中古にしようかな。」と思い、江熊さんに電話をしてその旨を伝えた。そして、江熊さんと松村さんにその物件を見ていただくことになった。

後日、中古物件の前で待ち合わせをした。車から松村さんと江熊さんが降りて来られた時の衝撃は今でも忘れられない。半年以上お会いしていなかったお二人を見た時、「違う！おれは松家さんに建ててほしいんや！」という初心が吹き上げて来た。これで松村さんに「これいい家やね。」って言われたらもうおしまいやという気持ちでいっぱいだった。結果的に松村さんが、トイレが裏鬼門になっていることや、玄関が寒いことなど、色々なことを教えてくださったこともあり、この中

古物件を購入せずに済んだ。それにしても、何という迷惑をかけてしまったことか。今思い出すだけでも、申し訳なさが込み上げてくる。

もう一度土地を探す気になった時、私の気持ちに整理がついた。鶴山台4丁目の並木道沿いにある土地。やっぱりそこがいい！駅から遠いものの、「やっぱり私はあの道沿いに住みたい。」というのが本音だった。妻をいかに説得するか、あとはそれだけだった。妻は駅から遠いことがかなり引っ掛かっていた。どうするべきか私は考えに考えた。そして私の出した結論は「勝手に江熊さんの名前を使おう」という何ともずるいものだった。

私は妻に「あの土地、実は前から江熊さんも気になってるみたいで。あんなええ土地なかなかないって言うてはったで。」と伝えた。妻はかなりそこから前向きに考えてくれるようになり、それ以降も勝手に江熊さんの名前を乱用して妻の説得に成功した。私が妻の説得に成功するなんてことは予想だにできなかった。

私はいてもたってもいられず、江熊さんに連絡した。江熊さんはすぐに松村さんと土地を見に行ってください、「いい土地じゃないですか！」と伝えてくださった。もうこの時は空をも飛べそうな気持ちだった。中古物件に手を出そうとしていたことを思い出すと、なぜかウルウルきてしまった。そして江熊さんから「隣とは全然違う家作りますんで！」という一言。もう気分は最高だった。

## 打ち合わせの始まり

いよいよ打ち合わせが始まった。しかし、しかしである。江熊さんに「どんな感じの家がいいですか？」とか「外観はどんな風に？」と言われても全く答えられない。必死に頭の中から搾り出そうとしても全然いい答えが思い浮かばなかった。その日から、「自分にとってのこだわりって何なんだろう」とずっと考え続けるようになった。

ある時、妻が友達の家遊びに行くことになった。妻の友人が新築を建てたということで家を見に行ってくるのだという。私は全く行く気はなかったのだが、妻から「迎えに来てほしい」と言われたので、その新築の家に行くことになった。家に入るやいなや、妻の友人から、その家についてのこだわりを細かく説明された。壁紙や照明など、色々なこだわりを聞いていたが、何か腑に落ちなかった。帰りの車で妻と話ながら、「注文ばかりすることが本当の注文住宅だろうか？」、そんなことを考えていた。その時、私は、松家さんで家を建てるということそのものが私のこだわりでは

ないだろうかと感じた。以前、江熊さんの質問にほとんど答えられなかったけれども、別にいいじゃないか。自分たちの思いをぶつけるだけではなく、松村さんと江熊さんと一緒に家作りをすることが何より私のこだわりであるということに気付くことができた。

ちょうどその頃は夏休みで、私が家を建てるという噂を聞きつけた職場の方々に「どこで建てるのか?」、「どんな間取りか?」など様々な質問を受けた。そして、年配の方々が口を揃えて言ったのは、「すぐに施工業者決めたらあかんで! 5社ぐらいに見積もりとってとにかく値段下げてもらい!」とうことだった。その話を聞いて、なんだか虚しくなった。家作りってそんなものなのかな…と。しかし、よくよく話を聞いてみると「建ててもらった後に日当たりがすごく悪かった」、「間取りが思っていたのと違うかった」など、家を建ててもらうことに対して強い不信感を持っていることが分かった。家作りの失敗は、「いくらで家を建ててもらうか」を重要視した時から始まるのではないだろうかと、この時感じた。いくらで建ててもらうかではなく、どれだけ信用できる人に家を建ててもらうか、そちらのほうが何より重要だと感じた。

## 間取り

江熊さんからは、「土地の決済をしに行く時に渡す図面は見ないでくださいね。」と言われていたが、私は気になったらいてもたってもいられない性分のため、銀行に行く前にその図面を見てしまった。玉手箱は開けたら駄目なのに。すると……LDKは14帖、何もお洒落な感じもなく、私は茫然としてしまった。「江熊さんならどんな時も全力投球。きっと銀行用の図面と言えども、ものすごくいいものを書かれているはず!」という勝手な思い込みと期待をしてしまったため、実際の銀行用の図面を見て血の気が引いた。目の前には矢野さんがいて、今から土地決済に行かなければならない。「どうしよう、やっぱりこの土地やめるって言おうかな……。」と一人でパニックになっていた。何とも浮かない土地決済、その日はしょぼんとして家に帰った。「子どもが走り回れる家」がよかったのに、と一人で落ち込んでいた。今から思えば自分で勝手な思い込みをしていただけなので、何とも間抜けだと思う。

いよいよ図面が出来ましたという江熊さんからの連絡があり、本当にドキドキした。「どうしよう、あの銀行の決済の時の図面と変わってないのかな」という不安のもと、事務所に伺った。机の上には明らかに図面が置いている。でも、敢えて見ないようにした。この時の緊張感は半端ではなかった。そして、いよいよ江熊さんが図面を見せてくださることに。見た瞬間、驚いた。そこに

は、もう「子どもが走り回れる」家があった。「え〜!!!」とうれしい悲鳴を上げてしまった。私は、「メロスよ、ぼくは君を疑った。僕を殴れ!」に似たような感じで、「私は江熊さんを疑った。しかも勝手に。僕を殴ってください!」みたいな感覚だった。本当におしゃれで、無駄なスペースがなく広い。もう私はうれしくて、その日一日図面を眺めていた。寝る前も何度も何度も見返した。

間取りを考えていく上で、江熊さんに感銘を受けたことがある。それは、「リビング階段にするとうなるか」、「渡り廊下をつけてみたらとうなるか」というちょっとした発想を、全て図面にして見せてくださったことだ。江熊さんにとっても「正直、これはないな。」と思っている時もあったはずだが、すぐに図面にしてメリットとデメリットを的確に教えてくださった姿勢は今でも忘れられない。江熊さんの真摯な姿勢があったからこそ、しっかり納得して図面を決めることができた。

## 地鎮祭

何度も言うように、私はポンスケである。地鎮祭の重要性はあまり分かっていなかった。しかし、勝手に工事を進めるのはその土地の神様に対して失礼であること、そして松家さんに気持ちよく仕事をしていただきたいという思いで地鎮祭をすることになった。地鎮祭の日、私達夫婦の両親も揃った。地鎮祭が始まってくると、松村さんの目つきがかなり鋭くなったことに気付いた。地鎮祭に臨む自分の気持ちの軽さが恥ずかしかった。神棚に向かって拍手をした時、私達夫婦はぱちぱちという音が響いただけだったが、松村さんと江熊さんと、そして矢野さん、お三方の拍手がとてもきれいに揃っており、ここでもまた恥ずかしくなってしまった。地鎮祭が終わり、その日集まった親族全員でご飯を食べることになった。会話が進むにつれて、親族みんなが素敵な家が建つことを心底願っていることがよく分かり胸が熱くなった。地鎮祭そのものも大切だが、地鎮祭をすることによって、親族が集まりさらに家について語り合うことができた。何とも幸せな時間を過ごすことができた。

ちなみに、その日は確実に雨の予報だったのだが、地鎮祭が終わるまで雨は降らず、終わった直後に雨が降った。なんという奇跡か。

## 上棟式

地鎮祭も終わり、基礎の工事が始まった。何度も足を運び、基礎を見に行ったが、これまたびっ

くり。めちゃめちゃ小さい！あれあれ、和室2帖ぐらいしかないんちゃうの？と目が点になった。後から江熊さんに聞くと、「基礎の時点では家は小さく見える」ということだったので、少し安心した。

日は経ち、上棟式の日。今日は上棟だと思い、朝から現場へ。すると、今までなかった柱のような木がどんとたっている。「うわ～！！すごい！」と車の中で叫んだ。松村さんに挨拶をしなければと思い、松村さんのもとへ。しかし、松村さんの眼光がかなり鋭く、いつもと雰囲気違った。この頃から、事務所でお会いする時の松村さんと、現場でお会いする松村さんは全く違う人だなと感じるようになった。職人モードに入っている時の松村さんの目は、本当に鋭かった。

上棟式の時間が近づいてきて、人もどンドン集まってきた。少し離れたところから家を眺めてみた。まだ上棟が終わった段階の家。それでも、なぜだか分からないが熱いものが込み上げてきた。上棟式が始まり、四方を清める時、絶対息子にも手伝わせようと思った。息子が紙をまいてお清めをしていた時、また熱いものが込み上げてきた。「息子が幾つになっても、我が家が一番と胸をはれる家を建てたい」と思っていた私にとって、息子が上棟式で一役かっている姿を見て涙が出てきてしまった。

上棟式では、吉野のヒノキの素晴らしさを聞くことができ、大変勉強になった。たくさんの職人の方々を目の当たりにし、たくさんの方に支えられてこの家ができるということも実感した。上棟式の素晴らしさを痛感できた一日だった。

地鎮祭も上棟式もやるまではあまり分からなかったが、両方とも必ずやるべきだということがよく分かった。これは正直理屈どうこうではなく、絶対やったほうがいい。やればその素晴らしさと必要性が実感できる。

## 打ち合わせ

打ち合わせが毎週のように続いた。思い返せば、土地が決まってすぐの頃は事務所に行けるというだけで心が踊り、前日うきうきしながら寝ていたものだった。それが、毎週のように打ち合わせができる、何と贅沢なことかとよく思っていた。江熊さんと松村さんとお話ししていると、明日仕事とか、時間がどうか細かいことはどうでもよくなっていくほど、とにかく楽しかった。それに、息子が松村さんと遊ぶことを心待ちにしていた。車の中で「きょう、まちゅむらしゃん？」とよく聞いていた。松村さんがいらっしゃるからこそ、息子は毎回楽しんで事務所に行かせていただくこ

とができた。松村さんと私の息子は、完全に強い絆で結ばれているようだった。

初めて図面を描いていただいた時、私達夫婦のぼんやりしたイメージを形にされていることに驚き、江熊さんの技術に感服した。だからこそ、瓦の色や床材の色など、様々なものを選ぶ必要があったが、「江熊さんにとってこれはない」というものは絶対選ばないようにしたかった。私達夫婦は、「松家工房さんがいいと思う家に住みたい」のであって、自分たちの思いを無理やりでも通したいわけではなかった。むしろ、無理やり通したいもの自体あまり無かったのだが。

自分たちのイメージと江熊さんのイメージが合致するものを毎回選んでいくのは実に楽しかった。私の選択したものと江熊さんが選択したものが一緒だった時はめちゃくちゃうれしかった。そうなると思えないもので、最初はあまり選べなかったのに最後の方は「これやな」というデザインを決めることができた。江熊さんは、ちょっとしたことでもサンプルを取ってくださったりするので、どれも納得して決めることができた。

## 現場へ

毎週土曜日の朝、現地に足を運ぶのがとても楽しみだった。だんだん家の中も仕上がってきているのが分かり、見る度にうれしかった。土曜日の朝はいつも張り切って現地に行っていた。しかし、なかなか中をじっくり見ることはできなかった。というのも、何分、家電も気が引けて値切ることができない私。あつかましく、「中を見せてください！」と言えればいいのだが、作業の邪魔になるのではと気が引けてなかなか言えなかった。それでも、いつもリビングの大きな窓は目に入っていた。松村さんの自宅を拝見した時に憧れた大きな窓が、自分の家にもある。そう思うだけで、いつも幸せだった。

ある時、現地で壁の色を決めることになり、お昼頃に現場に足を運ぶことがあった。その日は家の中をじっくり見るができるというのでわくわくしていた。いざ中に入ってみると、木の存在感が素晴らしく、まだまだ未完成ではあるものの素敵な家になることは間違いないと確信した。特に感動したのは、2階の屋根である。ただの通路として使う場所の屋根がとにかくおしゃれだった。どこかの回廊を歩くような気分になり、とにかく驚いた。子ども部屋の屋根も見事で、そこがリビングでもいいぐらいだった。そして、窓から見える景色も最高だった。それぞれの窓から見える景色が違い、同じ家なのに部屋ごとに違う空間にいるようだった。その時、やはりこの土地と縁があ

ったんだなと再確認できた。「早く住みたい」という思いが爆発しそうなぐらい、この日はいい衝撃を受けた。何より妻がとても喜んでいて、それが私にとってはうれしかった。

## 足場がとれる

何度足を運んでも外観だけは分からなかった。足場とネットで全く見えなかったのである。なんとか自分で想像してみるものの、やはり分からなかった。足場がとれる日が決まった時、とてもわくわくした。その日を心待ちにしていたのだが、当日はあいにくの雨だった。今日は無理かなと思っていたが、江熊さんと連絡したところ松村さんは現場に向かってくれているということだった。もしかして今日足場が取れるかも。期待はますます膨らんだ。そして、また江熊さんと連絡を取った。しかし、江熊さんは開口一番「どうしましょう」とおっしゃられた。私としては江熊さんなりのジョークかと思っていたら、江熊さんはずっと「どうしましょう」とおっしゃられた。この時私は「雨で現場の人が足を滑らせて、足場の機材を家にぶつけたんだ」と真剣に思い込んでいた。すると、江熊さんは「ものすごくいいみたいですよ！」と・・・・・・・・。「なんじゃそりゃー!!」、うれしかったが、あの無駄なドキドキを返してほしい気分だった。こうなったら、私のいてもたってもいられない虫が動き出す。次の日早朝から一人で外観を見に行った。わくわくしながら、車を走らせていると、明らかにおしゃれな瓦が見えてきた。そして、全体像が見えた時、言葉を失った。今でもこの時の感動は言葉にできない。おしゃれとか、かわいいとか、そういうことではなく、この家に携わった方々の情熱が迸る外観。本当に見事だった。「この家に住めるんだ」という熱い感動が込み上げてきた。

それでも、妻に見てもらうまでは安心できなかった。次の日、妻と共に外観を見に行った。妻は外観を見た瞬間に「わ～すごい！」を連発していた。「何回も見たくなる」と言って喜んで妻を見て安心した。

## 完成

いよいよ家の中が完成し、中を見せてもらうことになった。高揚感が収まらず、またこれまでの色々なことを思い出していたこともあり、前日あまり寝つけなかった。

当日現地に行くと、もう松村さんと江熊さんがいらっしやった。松村さんが「早よ、中見に行こう！」とおっしゃられたが、ドキドキし過ぎてなかなかドアを開けることができなかった。それで

も、意を決してドアを開けてみると、もうそれはそれは驚いた。ただ、ここからの感動はもう言葉にすることは難しい。どんな書き方をしても、全てが軽々しいのである。間違いないことは、松家さんの情熱が結集した空間が広がっていたということだ。

どうしてもこの先を知りたい方は、一度マイホームへお越し下さい。

### 松村さん、江熊さんへ

この度は、本当にありがとうございました。松家さんで建ててよかったと感じているのはもちろんですが、私が今一番感じていることは、「松村さんと江熊さんにお会いできてよかった」ということです。松村さんと江熊さんからは、人のために仕事をするのがどれほど大切か、そしてその姿勢がどれほど人を感動させるのかを直に教えていただきました。人間、本当に感動した時はこんなに表現し辛いものかと実感しました。これからもずっとお付き合いさせていただきたいというのが私達の願いです。

松家さんにどういった形でお返しをすればいいのだろうということを、よく考えていました。ただ、どんな物をお渡ししても不十分で、やはりお返しできるとすれば、私達家族が笑顔で毎日暮らしていくことかなと感じています。この家があるからこそできる家族とのコミュニケーションを大切にしていくことで、私達家族が幸せになっていく。それ自体が、恩返しになるのかなと思っています。

また、私は松村さんと江熊さんとの出会いに喜びだけでなく、責任を感じています。というのも、(私は何の宗教をしているわけではないですが) お二人にお会いできたのは、「本物の仕事はいかなるものか」を勉強するためと思えて仕方ないのです。お二人の仕事に向き合う姿勢には、何度も何度も感銘を受けました。分野は違えど、本物の仕事人とお会いできた以上、お二人は将来の私の目標なのです。ただの平凡な仕事人で終わればお二人にお会いできた意味がありません。必ずプロにならなければいけないという責任感を今強く感じています。

松家さんに建てていただいた家に住めるのはうれしいのですが、それと同時に、いつものようにお会いできなくなるのは、本当に淋しいです。要件なんて無くて結構ですので、いつでもご連絡下さい。家族全員心から感謝しております。ありがとうございました。